慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アーキテクトとしての正力松太郎
Sub Title	Matsutaro Shoriki as an architect
Author	烏谷, 昌幸(Karasudani, Masayuki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2025
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.75 (2025. 3) ,p.37- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 鈴木秀美教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20250300-0037

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アーキテクトとしての正力松太郎

烏谷昌幸

1　天覧試合舞台装置の設計者

1959 年 6 月 25 日，この日後楽園球場を大観衆が埋め尽くしていた。天皇，皇后両陛下を招いてのプロ野球巨人対阪神戦，いわゆる「天覧試合」が行われたのである。

参加した選手たち 1 人 1 人が研ぎ澄まされたプレーで観客を魅了し，球史に残る好ゲームが繰り広げられた。その極めつけが，4 対 4 で迎えた 9 回裏，先頭打者の長嶋茂雄が放った劇的なサヨナラホームランであった。

ノンフィクション作家の佐野眞一も，当時家に届いたばかりの白黒テレビの画面でその劇的なホームランを目撃したひとりであった。彼は 1994 年に出版された『巨怪伝』という作品において，カクテル光線を浴びながら美しい弧を描いた長嶋のホームランが，「まるで幻の蜃気楼のように子供心を陶酔させた」（佐野 2000：8）と思い出を記している。

同作品の冒頭において，佐野は長嶋に対して行ったインタビューから，次のような証言を引き出している。

> それまでプロ野球は人気があるとはいえ，まだマイナーなスポーツだったんです。選手の社会的プレステージも低かった。それが，あの“天覧試合”で，一気にメジャーなスポーツになった。ええ，ええ，ナショナルなスポーツになったんです。（佐野：11）

この試合に先立つおよそ 2 ヶ月前，当時の皇太子（= 現在の上皇明仁）の婚礼の儀が行われるにあたって，テレビ受像機が爆発的な普及をみせていた。そのテレビを通じて，天覧試合は広く全国に生中継されたのである。いわばプロ野球は，天皇という権威，テレビという新しいメディアの力によって，一躍不動の国民的スポーツへと進化を遂げたのであった。

さて，この歴史的天覧試合の舞台装置をつくりあげた中心人物こそが，正力松太郎である。正力は，戦前，経営の傾いた読売新聞社の経営者となって同紙を有数の全国紙へと成長させた人物であり，戦後はプロ野球，テレビ，原子力発電の導入事業に尽力し，「プロ野球の父」「テレビの父」「原子力の父」と異名をとった人物である。佐野は，インタビューの中で正力の名前が出た瞬間，長嶋の顔が昭和天皇について言及された時以上に恐懼の表情となったことを興味深く描写している（佐野：12）。スーパースター長嶋茂雄は，正力の存在無くしてあり得なかったのである。

本研究において何より注目したいのは，佐野が正力を大衆の欲望の流れを方向付ける「設計者」のごとき存在であったと評していることだ[1]。この指摘は，大衆の心をつかむ天

才としばしば評された正力についての的確な形容であるばかりか，大衆社会論の根底にある問題意識にまで鋭く迫るものである。

佐野と同世代のノンフィクション作家であり，東京都知事を務めた猪瀬直樹も，『欲望のメディア』において正力松太郎を取り上げている。興味深いことに，同書の解説を執筆した思想家の東浩紀もまた，猪瀬の独特の権力観を読み解くキーワードとして，「設計者」を意味するアーキテクトという概念を用いている（東 2013）。

本章の目的は，佐野，猪瀬の作品や東の議論から示唆を得ながら，正力松太郎をひとつの事例としてアーキテクトの権力とはいかなるものかについて考えてみることにある。具体的には，アーキテクトとしての正力がどのような役割を果たしたのかを検討する。とりわけ天覧試合を実現した正力に焦点を当てることによって，天皇制を支える情報環境の設計（= アーキテクチャ）がアップデートされた局面を浮き彫りにしてみたいというのが本章の狙いである。

「建築」を意味する「アーキテクチャ」は，アメリカの憲法学者であるローレンス・レッシグが，インターネット規制に関する研究に取り組む中で，人間の行動を規制する方法についての基礎的な考察を行ったことで一躍脚光を浴びるようになった。彼は規範，法律，市場という 3 つの方法に加えて，アーキテクチャに注目し，ほとんど意識されることのない情報技術の設計（= アーキテクチャ）が人々の行動を規制する力の大きさに注意を喚起したのである（レッシグ 2007：170-93）。

この議論を受けて，先に触れた東浩紀が，フーコーやドゥルーズという現代思想における権力論の可能性を再評価するための道筋（= 環境管理型権力）を示したことはよく知られている（東 2002）。例えば東は，無賃乗車を防ぐにはどうすればよいかという身近な話題を取り上げながら，規範意識や法律に頼って規制する以上に，自動改札を設置して無賃乗車が物理的に実行困難な環境を設計してしまうことの有効性を論じてみせた[2]。このように情報技術を駆使して環境設計を行い，人間の行動を方向付ける「環境管理型権力」が，今日のわれわれの日常行動に影響を及ぼす力としてますます大きな役割を果たすようになっていることに東は注意を喚起したのであった。

もともと情報社会論の中から登場してきたこのアーキテクチャの概念は，今日幅広い意味で用いられるようになり[3]，議論がやや拡散傾向にある。本章においては，人間の欲望や行動を方向付ける情報環境の設計を意味するものとしてアーキテクチャの概念を用いる。またそのようなアーキテクチャの設計に関わる人間のことをアーキテクトと呼ぶ。今後のメディア研究にとって，アーキテクチャないしアーキテクトの権力について理解を深めていくことは極めて有益であると考え，このテーマに取り組む次第である。

以下，アーキテクトとしての正力が果たした役割について検討を加えていく。まず正力特有の大衆論を検討した上で，彼が天覧試合の実現を通して天皇と大衆を結びつける役割を果たしたことを論じていきたい。最後の節では，アーキテクチャ論と大衆社会論が共有する課題に注目しながら，大衆（マス）概念を再検討する今日的意義についても言及してみたい。

2　大衆の心をつかむ

正力松太郎は，1885 年に富山県に生まれた。高岡中学，第四高等学校を経て東京帝国大学に入学し，卒業後に一度内閣統計局に勤めたが，翌年高等文官試験に合格し，1913 年に警視庁に入った。米騒動の鎮圧，普通選挙要求デモの取り締まりなどで辣腕を発揮し，警察官僚としての将来を嘱望されたものの，当時の皇太子（後の昭和天皇）が襲撃を受けた虎ノ門事件の責任を取る形で 1924 年に警視庁を懲戒免官された。

官職の道を断たれた正力は，同年経営が傾きかけていた読売新聞を買い取り，第7代の社長に就任する。前年の1923年，関東大震災によって関東エリアの新聞は壊滅的な大打撃を受けており，その間隙を突くようにして大阪から朝日，毎日が関東地域に進出し，勢力を急拡大させている頃であった。

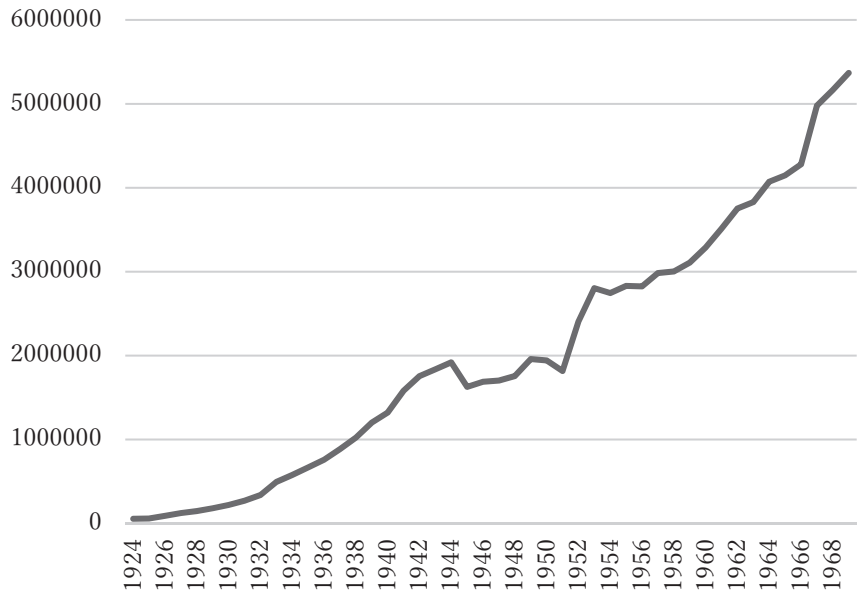
正力が社長に就任した当時，5万部程度の発行部数しかなかった読売は，ここから急成長を遂げていくことになる。正力の社長就任から10年後には約57万部に増え，日中戦争が始まる1937年には80万部を突破し，長引く戦争の間に180万部を超える成長を遂げた（読売新聞社 1994：666）。

正力の読売が，関東ローカルの弱小紙から主要全国紙へと成長を遂げることができたのはなぜなのか。この驚異の成長と成功に大勢の人が関心を寄せ，これまで多くの正力論が論じられてきた。

メディア史研究者の有山輝雄は，正力がそれまでの新聞の歴史と完全に断絶していることが，彼の独自の新聞経営の前提となっていると指摘している（有山 1982：1066）。とりわけ言論に関わる規範意識を他の言論人のように持ち合わせていなかった点は大きい。正力は自ら語る通り，警視庁時代の経験から新聞が持つ「筆の力」を認め，新聞の世界で大きな力を掴み取ろうと考えて転身してきた人間であった。新聞の力は部数の多さによって決まるというシンプルな信念が揺らぐことのなかった正力は，部数の拡大を狙うにしても，あまりに露骨な商業主義に走ることが多く，言論人としての自負を持つ人間には到底思いもよらないことをしばしば実行していったのである。

ただしそこに何の哲学もなかったわけではない。新聞として部数を伸ばすためには，端的にいって，大衆の心をつかむ必要があった。この大衆の心をつかむという一点において，彼の独自の考え方はいまでも注目に値する。

部数拡大のために具体的に正力がとった戦略は，なりふり構わぬメディア・イベントの展開であった。言論で勝負するという正攻法ではなく，大衆が喜ぶイベントを派手に打ち上げて，読者を獲得していくという方法である。例えば，正力がアメリカのメジャー・リーグの選手たちを日本に招いて日米野球を実施し，これが日本に職業野球が生まれる



図表1　読売新聞発行部数の推移[4]

きっかけとなったことはよく知られている。だが，これに限らず正力の読売は，実に多彩なイベントを次々と手がけていった。国技館での納涼博覧会，上野美術館で開催された名宝展，本因坊対雁金七段の囲碁対局，日仏ボクシング大会，三原山火口探検，多摩川園菊人形展，日米国際庭球試合などが，購読者の増大に大きく貢献したメディア・イベントとしてしばしば語られてきた（読売新聞社 1994）。

これらの事例全てを詳しく説明する余裕はないが，正力の大衆論を知るためには，いくらか事例の詳細に立ち入る必要がある。ここでは本因坊対雁金七段による囲碁の対局について取り上げてみよう。この対局は「世紀の対局」ともいわれ，空前の囲碁ブームをもたらし，読売新聞社史でも特筆されている事例である[5]。

本名田村保寿こと本因坊秀哉（しゅうさい）は，雁金（かりがね）と並んで前本因坊秀栄門下の両雄と言われた弟子であった。秀栄の死後，跡目をかけて両者は戦い，勝利した田村は本因坊の名跡を継いで，名人秀哉を名乗った。しかし戦いに破れた雁金は，所属していた主流の日本棋院を抜け出し，棋正社を興してこれに対抗していた。いわば跡目争いがきっかけで囲碁の世界が二大勢力に別れて睨み合う状況が生まれていたのである。

この因縁のライバル対決を実現させたいというのは，かねてより多くの人が望み考えたことであった。というのも，囲碁をよく知らない人間であっても，こうした頂点を決する因縁の対決は劇的な物語性に満ち，人の好奇心を刺激するものだからだ。もし興行が実現できるならば間違いなく大きな関心を呼ぶと期待されたわけである。だが，各新聞社が幾度も企画を立てながらも，日本棋院副総裁で財政後援者である大倉喜七郎という人物が，秀哉の他流試合を厳しく禁止していたため実現することができなかった。

当時弱小紙であった読売にこうした大型企画がいきなり持ち込まれることはなかった。主要な新聞社が軒並み目をつけるほど魅力的でありながらも，実現困難で半ば諦められていた企画が正力のもとに転がり込んできたのである。

正力が独自の大衆論を語る際に常々語ったのは，「やる以上は，第一等」のものに狙いを絞り，そこに全てを投じなければ意味がないということであった[6]。困難だからといって，二番手，三番手の企画を実施しても，それは結局のところ大衆の心を捉えるものにはならない。逆にいうと，第一等の企画に出会うことがあるならば，どんな困難にぶつかっても必ずや実現しようと異常な執念を燃やすのが正力という人であった。それは，どれだけ実現困難にみえても，天下第一等，空前絶後のものを引っ張り出すことができれば，必ずや人々の度肝を抜くことができる。そうすれば，必ずや大衆はついてくるという強固な信念を彼が持っていたからだ。

もちろん，こうした「第一等主義」の信念を貫徹するための裏付けとなる力が彼にあったことが肝心なところだ。正力には東大，警視庁時代から続く政官財に張り巡らされた幅広い人脈があった。「世紀の対局」の実現に向けて動いた時も，最大の壁である日本棋院副総裁・大倉喜七郎に正面から対局実現を申し込み一度は断られた。その後，大倉を突破するために正力は，政財界の囲碁好きの友人たちを巻き込んで「帝国棋院」なる組織を創立し，規約までつくり，本因坊を引き込んで棋界を三分割するという構想まで仕立てて，それを大倉に突きつけた（御手洗 1955：173）。「帝国棋院」の規約や参加予定の棋士，さらには朝野の名士が勢揃いした「帝国棋院」の会員名簿を目の当たりにして，大倉は完全に脱帽し，対局を承認したのだという（御手洗：173）。

名宝展を開催した折には，五摂家の筆頭である近衛家に伝わる門外不出といわれた藤原道長の「御堂関白日記」に最初に目をつけた（読売新聞社 1994：116）。これこそが第一等であると目をつけたのである（御手洗 1955：212）。このケースでも，正力以前には帝国博物館が度々出品を依頼して断られていたという経緯があった。それほど希少であり，また世界的に有名なこの秘宝を，正力は近衛文麿公爵に直談判してくどき落としたのであ

る。門外不出といわれた秘宝が登場する展覧会になったことで，他の華族たちは，出展しないことで自家所有の家宝の価値が下がることを恐れ，その後我先にと家宝の出品に応じたといわれている（御手洗：213)。正力が読者拡大を狙ったメディア・イベントの成功のために有力者との間の人脈を駆使していた様子がよく伝わってくるエピソードである。

「世紀の対局」を実現するにあたっては，イベントの演出も冴えていた[7]。まず読売紙上で，棋正社の代表である雁金七段を筆頭とした公開の他流試合申込状を発表した。事情を知らない世間は当然ながらドリーム・カードの実現を期待して注目する。そこで翌日以降，頭山満や鳩山一郎らの名士，また著名な囲碁関係者らにこの対局を実施すべきか否か議論させ，熱を煽っていった。そして，世論が対局実現に向けて大きく傾いたタイミングを見計らって，日本棋院が理事会を開き，この挑戦に応じる決定を下したと大きく報道し，当事者たる本因坊，雁金をはじめ関係者の談話を連載し，「世紀の対局」が実現していく筋立てを新聞紙上で演出してみせたのである。

既に実施が決まっているイベントである以上，このようなプロレス興行的な演出は「やらせ」であるし，さも報道であるかのようにみせかけながら，その実，手前味噌な「宣伝」でしかない。言論人の自覚が強い人間であれば，ここまでの「演出」は普通，躊躇われるであろう。しかし正力には他の言論人にあるような矜持が備わっていない。読者拡大のための有効な手段ならばなりふり構わず実施していったのである。

こうした演出も，すべては大衆を驚かせるためであった。天下第一等，空前絶後のもので大衆を驚倒せしめ，大衆の心をつかむという方法こそが，正力流の経営術の核心であった。こうした正力独自の大衆論は，社会理論の観点からみても非常に興味深いものがある。有山は，「大衆は偶像崇拝者である」という御手洗辰雄による正力論の表現を踏まえながら，大衆の偶像崇拝性を「市場化」していったところに正力一流の成功の秘密があったと論じている（有山 1982：1073)。この場合の偶像崇拝という表現は，傑出したものを崇めたいという人間の隠れた願望を指すものであり，政治や宗教の領域におけるカリスマ現象を説明する際に注目されてきたものと同種のものといってよい[8]。

「パンとサーカス」という表現がよく知られているが，大衆は日常の退屈を紛らわせるために，「サーカス」，つまり，「奇跡」に触れたいという願望を密かに抱えている。「奇跡」という言葉がやや大袈裟であるならば，少し控えめに，「自分の想像を超える何か」と言い換えてもよい。非日常的な「想像を超える」何かを目の当たりにし，我を忘れる経験に浸りたいという願望を多くの人間が抱えている。その願望を満足させることができるものこそは，大衆の心をつかむものである。正力はこのことを知り尽くしていた。だからこそ，二番手では，全く意味がないと言い続けたのである。大衆が二番手を崇めることは決してないからだ。想像を超えた「奇跡」を崇める大衆の心性にこそ，最大の商機が潜んでいるのである。

3　天皇の権威

大衆の偶像崇拝願望を誰よりも深く知り抜いていた正力は，天皇や皇室を崇める大衆心理を決して軽く考えることがなかった。正力の秘書を務めていた橋本道淳は，1955 年の 2 月に正力が衆議院総選挙に出馬した時の様子を語るなかで次のような興味深いことを述べている。

> （正力は）野球にもテレビにも原子力にも，天皇を担ぎ出すことが一番だとも言っていた。それには政治家になるのが一番と，決然として政界に打って出た。（佐野 2000：234)[9]

天覧試合について考えてみようとするならば，天皇の権威についての考察を避けて通ることはできない。天皇についてはこれまで膨大な議論が費やされてきたが，ここでは天覧試合について考えるためのいくつかのポイントに絞って議論してみたい。

権威という概念は，通常権力という概念と対比させて，人間の自発的な服従を説明するために用いられる。政治家が法律の作成や予算の配分を通して人を動かす場合，これは権力という概念によって説明されるが，何もいわない天皇に敬意を払い，人間が自発的に行動するような場合，ここで働いている力は権威という言葉で説明される。

権力を効果的に行使するために権威の助けが必要であることは，よく分かる道理であろう。何がしかの指示や命令を出して他者を従わせようというときに，物理的暴力をその都度用いなければならないような状況は絶望的な無秩序状況でしかない。利害対立がある場合に暴力を用いて決着をはかるのではなく，言論を戦わせることによって決着をつけるべきというのが近代民主主義の重要な原則であるといってよい。ただし，言論の戦いもまた実際には膨大な時間とエネルギーを必要とするものである。それゆえ命令や指示に対する服従を引き出すコストをできるだけおさえたい人間，政治的秩序の形成をできるだけ効率的に達成したいと望む人間にとって，指示や命令を出さずとも，本来命令や指示を受けるはずの側の人間が自発的に望ましい行動をとってくれることが最善である。したがって実効性の高い統治とは，自発的服従が最大限引き出されるような環境が設計されているということに他ならない。

日本の政治権力者たちがこの自発的服従を促すための装置として開発してきたのが，他でもない天皇制である。そのため天皇制の歴史とは，統治者らによる天皇の権威の政治利用の歴史であるとさえいってよい。敗戦直後に大きなセンセーションを生み出した作家坂口安吾の「堕落論」および「新堕落論」においては，天皇制が人間心理に精通した少数の天才が編み出した独創的な政治的作品であるという興味深い考察が行われている。天皇制の評価をめぐっては様々な立場があるものの，ここではアーキテクトの役割について考える上で極めて示唆に富む坂口の以下の指摘を確認しておこう。

> 藤原氏や将軍家にとって何がために天皇制が必要であったか。何が故に彼等自身が最高の主権を握らなかったか。それは彼等が自ら主権を握るよりも，天皇制が都合がよかったからで，彼らは自分自身が天下に号令するよりも，天皇に号令させ，自分が先ずまっさきにその号令に服従してみせることによって号令が更によく行きわたることを心得ていた。その天皇の号令とは天皇自身の意志ではなく，実は彼等の号令であり，彼等は自分の欲するところを天皇の名に於て行い，自分が先ずまっさきにその号令に服してみせる，自分が天皇に服す範を人民に押しつけることによって，自分の号令を押しつけるのである。
>
> 自分自らを神と称し絶対の尊厳を人民に要求することは不可能だ。だが，自分が天皇にぬかずくことによって天皇を神たらしめ，それを人民に押しつけることは可能なのである。そこで彼等は天皇の擁立を自分勝手にやりながら，天皇の前にぬかずき，自分がぬかずくことによって天皇の尊厳を人民に強要し，その尊厳を利用して号令していた。（坂口 1957：123-4）

神を自称しながらその威光を保つことなどできない。しかし神をつくり，自らそれを崇めながら利用することはできる。それが天皇制のからくりであると坂口はいうが，ここでいう自らの権力行使のために「神」をつくるものこそがアーキテクトであるといってよい。留意すべきは，この神をつくるという行為が一方的な押し付けだけによって実現するものではないということだ。坂口が繰り返し強調したのは，天皇制が結局のところ，権威の支えなしに秩序をつくることができない人間の根源的弱さを反映したものであるということだった。

政治権力者たちが重宝してきた天皇の権威は，自然発生的に生まれ，何のメンテナンスもせずに維持されてきたものではない。その威光を守るために常に細心の注意が払われて

きたことに目を向ける必要がある。なかでも国家の敗戦は天皇の権威にとってもっとも深刻な危機をもたらすはずであった。

猪瀬直樹は『ミカドの肖像』において，日米開戦の直前に近衛文麿内閣が総辞職し，東條英機内閣が成立した際に，天皇の側近であった木戸幸一内大臣が日記に書きつけた内容に注目している（猪瀬 2005：830）。当時近衛内閣が倒れた後には，東久邇稔彦内閣を妥当と考える人が少なからずいた。皇族である東久邇以外に，もはや軍部の独走をおさえることができないと考えられていたからである。しかし結局できあがったのは東條内閣であった。猪瀬は当時の木戸の日記を参照しながら，木戸が日米の戦争に明るい見通しを持てなかったがゆえに，東久邇が首相になることに消極的であったことを鋭く指摘している（猪瀬：830）。敗戦によって天皇の権威が地に堕ちることを強く恐れていたのである。

興味深いことに，このような戦後の事態を見越しての懸念や配慮は，実は戦争相手であるアメリカにもみられた。戦争が終盤に差し掛かった頃，アメリカ政府の中には，戦争終結後，日本から軍国主義を一掃し，民主主義を定着させるために天皇の権威を利用しようという構想が生まれた。天皇の権威は一部の軍国主義者らによって悪用されることで国際社会にとって深刻な脅威となったが，民主主義を普及し，定着させるという目的のために善用することも十分可能であると考えたのである（ダワー 2004：4）。そのため，アメリカ政府は戦争終盤，天皇裕仁を攻撃するようなプロパガンダの内容を禁じ，その権威に傷がつかないよう配慮したのであった（ダワー：8）。

敗戦後に成立した東久邇内閣が，軍人たちに敗北を受容させ，武装解除させる上で大きな役割を果たしたことはよく知られているが，ここ一番重大な場面において天皇や皇室の権威が局面打開のための切り札として機能するよう日頃から細心の配慮が払われていたことを見落としてはならない。

天皇制のアーキテクチャ，つまり天皇制を支える情報環境の設計という問題を考える上でも以上のような視点は極めて重要である。敗戦後 1946 年元旦に「人間宣言」（正式には新日本建設に関する詔書）が発表され，天皇は神から人間になった。政治学者の松下圭一は，1958 年 11 月 27 日に皇太子の婚約発表が行われた後に出現した「ミッチーブーム」や「ご成婚ブーム」に注目しながら，「大衆天皇制」という概念を打ち出した。神と崇められた戦前の「絶対天皇制」から，国民大衆から親しまれることによって支えられる「大衆天皇制」への変化が生じたことを松下は論じたのである。

この劇的な変化は天皇制のアーキテクチャが，時代に応じてアップデートされる必要のあることを分かりやすく教えてくれる。自発的服従を最大化させる装置としての天皇制は，その実効性を保つために絶対天皇制にしても大衆天皇制にしても，それぞれに相応しいアーキテクチャ（情報環境の設計）を必要としているということだ。

絶対天皇制の時代，天皇を神として演出するためにもっとも効果的に利用されたメディアが「御真影」であった（猪瀬 2013：111）。御真影は天皇，皇后，皇族の肖像写真，絵画のことであり，戦前全国の学校に配されて皇国教育の重要なアイテムとして利用された。猪瀬直樹は，『欲望のメディア』において，御真影の陰に隠れていたがゆえに天皇はその威光を守ることができたのではないかという興味深い指摘を行っている（猪瀬：113）。ラジオ放送は 1925 年に既に開始されており，天皇もラジオを使って国民に語りかけることは技術的には可能であった。しかし，結局敗戦時の玉音放送まで天皇の肉声はラジオに流れることはなかった。猪瀬は，長い戦争の間，もし天皇が頻繁にラジオで国民を叱咤激励したならば，過酷な戦争を直接強いてくる天皇に次第に不満を募らせることになり，敗戦後昭和天皇への戦争責任を求める声はもっと厳しいものになっていたのではないかと指摘している（猪瀬：111）。御真影の陰に隠れ，沈黙を保つことが現人神としての威光を保つ最上の方法であったのだ。

大衆天皇制の時代，天皇や皇室は国民大衆に親しまれることによって支持される構図が生まれた。政治的，軍事的権限を持たなくなった戦後の天皇は，もはや軍事的英雄，国家理性の体現者であることを要求されなくなった（松下 1994：89）。それよりも，大衆が日常生活の中で求めようとする身近な理想を実現する人間であることが期待された（松下：89）。それはまず何よりも「幸福な家庭」を持つことであり，また国民が熱中する娯楽を同じように楽しむということであった。1958 年 11 月 27 日に皇太子の婚約が発表されて以降，週刊誌は，「平民」出身の正田美智子が自由な「恋愛」によって結婚するという「世紀のロマンス」の物語を大量に流通させてミッチーブームをつくり出し，皇太子を新しい「幸福な家庭」像の先駆的モデルへと仕立てていった。そしてテレビは 1959 年 4 月 10 日，「世紀のロマンス」のハイライトとなった主役二人のご成婚パレードを「戦後最大のメディア・イベント」（吉見 2002）と呼ばれるほど総力を結集して放映した。天皇や皇室をスター化していく週刊誌やテレビが大衆天皇制を支える有力メディアとなったのである。

4　天皇と大衆を結びつける

天覧試合の実現によって，プロ野球が社会的ステータスを格上げしたことを冒頭に述べた。天皇の権威を利用して，プロ野球は国民的スポーツへと成長したのである。だが，このことはプロ野球の側が天皇の権威を一方的に利用したということを意味しない。天覧試合の舞台裏を『長嶋茂雄をつくった男』において詳細に描いた岡邦行によると，天皇，宮内庁側からみれば，この天覧試合は，「人間宣言」後の天皇の大事なお披露目の意味合いもあった。

人間天皇のお披露目は，全国各地への巡幸という形で 1946 年 2 月の神奈川を皮切りに 1954 年 8 月の北海道まで，沖縄を除く全国各地へ総日数 165 日をかけて行われた[10]。もともと敗戦直後の政情不安を沈めることを目的に GHQ から強く勧められる形で始まった地方巡幸は，最終的に 1141 箇所を視察する 3 万 1 千 225 キロメートルに及ぶ旅となった。ただ，長期に及ぶ地方巡幸を実施したといっても全国民全てが天皇の姿を目にすることは当然できなかった。そのため，1950 年代末においても未だ人間天皇のお披露目には意義があったし，天覧試合のテレビ中継によって全国津々浦々に新しい天皇のイメージを広めることができることは好都合であった。

しかも当時既にプロ野球人気は凄まじい勢いで国民に広まりつつあった。1953 年にテレビの本放送が開始され，街頭テレビによって国民の中に異常なまでのテレビ熱が高まり，ボクシングやプロレスとともにプロ野球も人気コンテンツのひとつとして定着していった。とりわけ 1958 年に長嶋茂雄が入団して以降，メディアの中のプロ野球熱に一層拍車がかかり，プロ野球人気は大いに煽られていった。

国民の側にも人間天皇を是非直接見てみたいという欲望があった。天覧試合を克明に描いた『天皇と背番号 3』の著者佐瀬稔は，1954 年の皇居参賀に 38 万人の人間が押し寄せたのもこの欲望ゆえではなかったかと興味深い指摘を行っている（佐瀬 1983：39）。この時参賀客が二重橋で将棋倒しとなり死者 16 名，重軽傷者 69 名を出すいわゆる二重橋事件が起きた。佐瀬は，参賀者の中には皇室を崇拝してやまない人々も少なからずいたはずだが，それ以上に，神から人間になった天皇をほんの一目でいいので見てみたいという衝動が人々を二重橋に殺到させたのではないかと述べている（佐瀬：39）。

佐瀬は，天覧試合を観た観客たちへのインタビューを通して，この試合にも同じ側面があったと指摘している（佐瀬：39）。後楽園に 4 万人の大観衆が詰めかけたのは，伝統ある巨人阪神戦をみたいということに加えて，人間天皇を一目みたいという気持ちもあった

のだ。ただし，ロイヤルボックスの中にいた天皇の姿は，観客席からはほとんど見ることはできなかった。そのため天皇がくる特別な日を選んで観戦に行った人も，天皇を見ることはできず，白熱した試合や観客席で他の客と大いに盛り上がったことやスーパースター長嶋茂雄に夢中になったことばかりが記憶に残ったようだ。例えば佐瀬のインタビューに応じた大正 13 年生まれのある男性は次のように回想している。

> 特幹（特別幹部候補生）を志願して九州の鹿屋基地で特攻機の整備をやっていたんですが，8 月 15 日に聴いた天皇の玉音放送のことが忘れられないんですよ。…玉音放送を聴きながら，この天皇のためにと言って多くの人が死んだのだなぁと思った。といっても，ぼくはべつに天皇制反対ではないし，同時に皇室主義者でもない。ぼくの一生のある時期にたいへん重い存在だった，ということですね。
>
> 小学校 2 年生の息子が巨人の試合を前から見たがっていたし，ぼく自身野球は好きだから，あの夜，後楽園へ行きました。とくにあの晩を選んだのは，もちろん天皇がお見えになると聞いたからです。双眼鏡を持って行ったが，天皇のお姿はよく見えなかったな。
>
> 昔のことにこだわるのはぼくらの年代の悪い癖なんでしょうが，あのときも息子に天皇のお姿を見せて，お父さんが若いころにはこんなことがあったんだよ，と話して聞かせるつもりでした。しかし，結局何も話さなかったのと同じことだった。こっちがいくらしんみりしても，息子のほうがまるで乗ってこなかったものですからね。息子は「長嶋はどこにいるのか」と，そればかりに夢中でした。
>
> 感慨ですか。べつに何もありませんでしたねえ。昔そういうことがあった，というだけであってね。過去のことだと考えられるのは幸せなことだなぁ，と考えたのを覚えてますよ。　（佐瀬：39）

正力のアーキテクトとしての役割は，まさに新しい天皇のイメージを広めたい宮内庁側の利害と，人間になった天皇を一目みたいという大衆の欲望を結びつける舞台装置をつくり上げたところにあったといってよい。当然ながらこれは誰にでもできるというものではない。

天覧試合は，正力の企画，発案というわけではない。正力はこの舞台装置をつくりあげる人脈の要の位置にいたと表現するのがもっとも適当である。敗戦後，天皇の野球観戦は，アマチュア野球に関しては既に行われており，プロ野球熱の高まりを受けて，次はプロ野球と考え始める人も既に現れていた。天覧試合に先立って，セリーグからもパリーグからも宮内庁に天皇の観覧を打診する動きが現に既にみられていたが，すぐには実現しなかった（岡 1984：86）。

というのも，宮内庁内部でプロ野球の天覧試合に対する慎重論が根強かったためである。前例がないことも理由のひとつであったが，それ以上に，天皇の権威が営利事業に利用されることに対する警戒感が強かったのである（岡：84）。一部の球団にのみ利益が生じるようなことがあっても困る。天皇の権威を利用して自己利益を満たそうとする人間が多い以上，宮内庁側が天皇を担ぎ出そうとする人々の思惑や政治的な影響などをその都度慎重に検討せざるを得ないのは当然のことであった。

こうした状況において天覧試合が実現できたのは，正力の部下野口務を中心に，宮内庁，文部省，プロ野球関係者の人脈が上手く結びついたからであった（岡：15）。野口の父の淳吉は，警視庁時代の正力の上司であり，同じ富山県高岡出身の正力を特に可愛がっていた（岡：45）。その縁もあって野口は，正力が戦前つくった巨人軍の母体組織である「株式会社大日本東京野球倶楽部」に入社し，戦後もプロ野球の仕事に携わっていたのである（岡：102）。

野口は正力と同じ第四高等学校の出身者であった。岡の『長嶋茂雄をつくった男』には，野口と同じ四高の同級生で文部省体育局長となった清水康平，宮内庁の侍従であった小畑忠，また同じ四高 OB で宮内庁次長であった瓜生順良ら四高出身者のネットワークを通じて天覧試合が実現していったプロセスの詳細が興味深く描かれている（岡：15）。正

力は野口を通じてこのプロセスに大きな影響を及ぼす位置にいたのであった。

この天覧試合の実現過程には，いくつかの興味深い点がみられる。ひとつは，戦後文部省がプロ野球を社団法人として認可したことで，プロ野球が国家にスポーツとして公式に認められたということだ。1948 年 3 月に「社団法人日本野球連盟」が設立された際に，当時文部省管理局管理課長のポストにいた清水康平は，野口とともに文部省とプロ野球の間を橋渡しする働きを既にしていたという（岡：20）。文部省の中にプロ野球を国民的スポーツにしたいと考える人間が既にいたことは大きい。

いまひとつ，宮内庁内部の慎重論を説き伏せるためには，プロ野球側の意思が公式のものである必要があった。天覧試合を実施した後に野球関係者から不満が出るようであっては困るのだ。プロ野球側は，あくまでもプロ野球全体の総意による形をつくって天皇行幸のための奏請書を提出しなければならなかったのである（岡：88）。プロ野球全体の総意がどの程度の内実を伴うものであるかは別として，プロ野球を代表して交渉できる立場の人間でなければ天皇の権威を利用するなどということは到底叶わない。そして，まさにここに正力松太郎という人物が登場する必然的理由があったのだ。

正力は，新聞事業で大きな成功を収め，テレビの導入においても大きな役割を果たし，当時既に衆議院議員としても活躍し，何より日本にプロ野球を導入する上でもっとも中心的な役割を果たした人物であった。そうである以上，文部省や宮内庁の人間が天覧試合の実施の是非を値踏みする上で，正力の存在が決定的であったと考えられるのである。

こうして松下圭一が「大衆天皇制の縮図」（松下 1994：112）と呼んだ天覧試合が実現された。その後多くの人によって語り継がれることになったこの「伝説」の試合について，主審を務めた島秀之助は，冒頭の佐野の作品のインタビューに応えて次のように証言している。

> 私は昭和 13 年から 37 年まで審判員としてマスクをかぶりましたが，あの天覧試合のような名勝負は後にも先にも経験がありません。長嶋，王，坂崎，藤本とホームランバッターはここぞというときにホームランを打つ。名遊撃手吉田の果敢な盗塁もあったし，守備でも，8 回，ショートの広岡（達朗）とピッチャーの藤田の巧みなピック・オフ・プレー（牽制球）で，2 塁走者の藤本をみごとに刺した。あのプレーがなかったら結果はどうなっていたかわからない。打つべき人が打ち，走るべき人が走り，守るべき人が守る。まさに球史に残る好プレーの連続でした。
>
> （佐野 2000：10）

この球史に残る好ゲームを目の当たりにして，大観衆は巨大な感動に酔いしれた。そしてその場に天皇もいたのである。天皇は，大観衆とともにプロ野球に熱中する姿をテレビ越しに広く全国民から見られることによって，人間天皇の新しいイメージを強く印象付けた。畏怖される神ではなく，親しまれ敬愛されることで天皇制の支持基盤が強化される大衆天皇制の原理がこれほど明白に示された瞬間もまたなかったであろう。

アーキテクトとしての正力の本領はこの天覧試合に凝縮している。天覧試合は全国にテレビ中継されることによって後楽園球場の観客のみならず全国民と天皇を結びつけた。そしてこのテレビを日本に導入する上で極めて大きな役割を果たしたのも正力であった。とりわけよく知られているように，正力が初代社長となった日本テレビが積極的に投入した街頭テレビは，日本のテレビ事業をいち早く軌道に乗せる上で大きな役割を果たした。この点については，放送史，メディア史におけるあまりに有名な事実であるため，ここでその詳細を取り上げることは省略したい。

ただし一点だけ注意が必要なことがある。それは，テレビ時代の出現という歴史的なメディア環境の変動を説明する上で，1 人の人間の業績を強調し過ぎることには慎重になる必要があるということだ。

特に留意すべきは，正力のテレビ導入事業が，アメリカ政府の冷戦戦略，対日政策の方針と合致したことで初めて可能になったという今日ではよく知られている事実だ[11]。アメリカの冷戦戦略の影響を抜きに日本のテレビ導入事業は理解できないのである。天皇制の存続にしても戦勝国アメリカの対日政策によって決められたことだ。正力論を突き詰めようとすると，敗戦国日本の国家体制を設計したアメリカという国家をひとつの強大なアーキテクトとして捉える視点が必要になってくる。

無論それは，正力をアメリカの手先として陰謀論的に非難するということではない。支配する力，より大きな権力を追求し続けた正力のような貪欲な人間は，自分よりも大きな権力者や権威と繋がり，自らの影響力を高めていこうとするのが常である。天皇やアメリカという同時代の最高の権威，権力者と深く関わるのも，正力にとっては必然的なことであった[12]。そこにあるのは陰謀というよりは，純粋過ぎるほどの権力への意志だ。アーキテクト論を深めるために必要なのは，陰謀論的な発想ではなく，新しい情報環境を創出するという営みに相応しい権力論なのである。

5　欲望の構造化

これまで天覧試合に注目しながら，アーキテクトとしての正力松太郎について論じてきた。最後に，以上の内容を踏まえた上で，大衆（マス）概念の再検討という本書の共通課題についても手短な考察を加えておきたい。

冒頭で触れたように，佐野が正力を大衆の欲望を方向付ける設計者のような人間であったと評したことに触れた。繰り返しになるが，この指摘は，大衆の心をつかむ天才といわれた正力の人物評として的確であると同時に，大衆社会論の理論的核心に迫るものでもあった。

アーキテクチャに関する議論を生み出した情報社会論は，いわゆる現代社会論の一種であった。学説史の詳細にここで立ち入ることはできないが，情報社会論も大衆社会論も，実は，現代社会論としてある課題を共有している。それは，社会の中の集合的な欲望や情動をいかに方向付け，制御するかという問題である。

実のところ，現代社会論としてこの問題に最初に正面から取り組んだのが，他ならぬ大衆社会論であった。大衆社会論は，19 世紀から 20 世紀にかけて西欧社会に生じた大きな変化，とりわけ産業革命，市民革命という言葉で広く知られている産業化と平等化の衝撃が社会にもたらした影響に目を向けていった。特に戦間期のドイツにおいてファシズムが台頭し，ナチスドイツが成立したことで，大衆社会論はその現象を読み解くための理論的枠組みを提供するという大きな役割を果たしていった。ナチスに熱狂的な支持を与えた「大衆」という存在をどう解釈すればよいか，大衆社会論が西欧文明の総体を射程に収めるような巨視的な文明論としての性格を持ったのもこうした課題の深刻さによるところが大きい。

レーデラーの「階級なき社会の脅威」（レーデラー 1961）という表現は，こうした西欧社会に生じた歴史的激動の一面を見事に切り出したものである。いま改めてレーデラーの問題意識に沿って「大衆（マス）」の概念を理論的に再評価するのであれば，大衆（マス）を何らかの実体的集団として捉えるよりも，社会の構成員が潜在的に抱えている「欲望や情動の集合的塊」を意味するものと解釈することが有益と思われる。Mass（マス）という言葉にはもともと構造的支えを失った無定形の不気味な集塊[13]というニュアンスが強く込められており，レーデラーの議論はそうしたニュアンスを明確に伝えるものである。

大衆社会論の思想史的意義は，まさに，「欲望や情動の巨大な集合的塊」をいかに制御することができるかという理論的課題を明確に取り出した点にあった。レーデラーの議論

が示唆するように，西欧社会の場合，人々の欲望を規制し，一定の方向付けを行っていたのが階級社会の枠組みであった（村上 1997：469）。例えば西欧社会には伝統的に，上層階級にはその地位に相応しい高潔さや大きな責任が伴うという「ノブリス･オブリージュ」の規範が浸透していた。人はそれぞれの所属する階級に相応しい規範，振る舞いに従うことによって，社会の秩序は定まり，安定を得ると考えられていたのである。それゆえ，産業化と平等化の衝撃によって階級社会の枠組みが崩れることによって，人間の欲望を方向付ける「構造」が弛緩し，極端な場合には，制御を失った人々の欲望が「大暴走」を起こしてしまうことが懸念されたのであった（村上：469）。

こうした大衆社会論の知的遺産の批判的検討を通して，人間の欲望を方向付ける「構造」についての示唆に富む考察を行ったのが，村上泰亮であった。村上は高度成長以後の一億総中流ともいわれた日本社会を「新中間大衆」という概念によって分析した『新中間大衆の時代』で一世を風靡した人物であるが，「ゆらぎの中の大衆社会」という重要な論文において，本章の問題関心にとって極めて示唆に富む考察を行っている。

村上の議論の重要なポイントは，西洋社会における「大衆（マス）」が構造を失った不気味な無定形の「塊」というネガティブな語感を持つ言葉であったというところにまで一度立ち返った上で，その無定形な欲望の塊が「構造化」されて安定を得るメカニズム，また構造を失って「流体化」していくメカニズムに焦点を当てているところにある。おそらくメディア研究者が，今日大衆概念を再考するにあたって何よりも大切なことは，こうした欲望の「構造化」と「流体化」のメカニズムを現代的なメディア環境のもとで考えてみるということであろう。

本章で取り上げたアーキテクチャの議論は，この欲望の構造化のメカニズムが大きく変質することで浮上してきた。東の文脈にそっていえば，それは「大きな物語」が失われた後の時代において，人々の欲望を構造化する新たな方法として脚光を浴びたのである（東 2002）。ここでいう「大きな物語」とは，日本でいえば「経済成長」や「万世一系」など国民をひとつにまとめあげ，国民大衆の欲望を方向付ける上で強い力を発揮した考え方のことを指す。

村上が大衆社会論を盛んに論じた 1980 年代は，価値観の多様化が進み，日々の消費行動を積極的に楽しもうとする価値観が広まった時代であった。彼はこうした風潮の中で日本の生産力を下支えし高度成長を可能にした「勤労の美徳」のような規範意識がどのように変質を遂げていくかに大きな関心を払っていたのである[14]。それは欲望を構造化し，社会の秩序を形成していく方法として，かつての西欧社会のように階級社会の枠組みへと逆行することはできず，さりとてアメリカ型の多元的社会をそのまま真似ることも難しい日本において，共通の規範意識を内面化していくという方法がもっとも現実的な秩序形成の道筋であると考えられたからであろう。

だが，今の日本において「経済成長」も「万世一系」も人々の心を強く捉えることはない。「大きな物語」の具体的内容は国や社会によって異なるが，総じて現代の先進国社会においては，人々の欲望を方向付ける魅力的な物語が失われ，物語を共有することで育まれるはずの共通の規範意識が弱体化しつつある。こうした背景があるゆえに，人々の規範意識に直接的に働きかけることを迂回して人間の行動を気づかれぬままに方向付けていくアーキテクチャの権力に注目が集まってきたのである。

今日もはや「大衆」について真剣に語る人はいない。しかし，大衆社会論が取り組んだ課題そのものが現在消えて無くなったわけではない。現代社会における巨大な人間の欲望をいかに方向付け，構造化していくことができるかという課題は依然として健在であり，この難問の前でわれわれは依然悪戦苦闘するしかないのである。

●参考文献

東浩紀（2002）「情報自由論第 3 回」『中央公論』9 月号，中央公論新社。http://www.hajou.org/infoliberalism/3.html にて閲覧可能。
———（2013）「解説　イデオロギーからアーキテクチャへ」猪瀬直樹『ミカドの肖像』小学館文庫，497-503 頁。
東浩紀・北田暁大編（2009）『思想地図 vol3. アーキテクチャ』日本放送出版協会。
有山輝雄（1982）「正力松太郎」『近代日本のジャーナリスト』御茶の水書房。
石田あゆう（2006）『ミッチー・ブーム』文藝春秋社。
猪瀬直樹（2005）『ミカドの肖像』小学館文庫。
———（2013）『欲望のメディア』小学館文庫。
岡邦行（1984）『長嶋茂雄をつくった男―天覧試合陰のヒーロー』三一書房。
佐瀬稔（1983）『天皇と背番号 3 ―長嶋が神話になった日』祥伝社。
坂口安吾（1957）『堕落論』角川文庫。
佐野眞一（2000）『巨怪伝―正力松太郎と影武者たちの 1 世紀　上・下』文春文庫
ジョン・ダワー（2004）『敗北を抱きしめて　下』岩波書店。
濱野智史（2015）『アーキテクチャの生態系―情報環境はいかに設計されてきたか』ちくま文庫。
松下圭一（1994）『戦後政治の歴史と思想』ちくま学芸文庫
御手洗辰雄（1955）『伝記　正力松太郎』大日本雄弁会講談社。
村上泰亮（1997）『村上泰亮著作集』中央公論社。
吉見俊哉（2002）「メディア・イベントとしての『御成婚』」津金澤聰廣編『戦後日本のメディア・イベント 1945-1960 年』世界思想社。
ローレンス・レッシグ（2007）『CODE VERSION2.0』山形浩生訳，株式会社翔泳社。
エミール・レーデラー（1961）『大衆の国家　階級なき社会の脅威』東京創元社
読売新聞社（1994）『読売新聞百二十年史』読売新聞社。
————（1987）『読売新聞発展史』読売新聞社。

●注

1. 佐野は以下のように述べている。「サーベルで大衆を弾圧した正力を，氾濫する河川を必死で堰止める土木請負人にたとえるとすれば，センセーショナルな紙面で大衆の興味をかきたてた正力は，刹那的な欲望の水路に大衆を導き込む運河の設計者にたとえることができた」（佐野 2000：191）。
2. 東（2002）を参照。
3. 東以後のアーキテクチャ論に関しては，濱野智史（2015）の研究がもっともよく整理されており，情報社会論としても秀逸である。濱野はレッシグの議論で前提とされているアーキテクチャの権力にいかに抵抗するかという問題意識から一度距離を取り，秩序形成の多様な可能性を考えるひとつの方法としてアーキテクチャ論に取り組む方針を示した。本章もこの濱野の方針に共感する立場で取り組まれた。
4. 読売新聞社（1994）666 頁を参照。
5. 本因坊と雁金の「世紀の対局」の概要については，読売新聞社（1994）の 111 ― 3 頁を参照のこと。
6. 例えば読売の社史には次のような表現が紹介されている。「天下第一等のものに人は目をみはる。だから成功もする。ケチケチして二，三流のもので間に合わそうとするから企画は失敗し，せっかくの出費も，死に金になる」（読売新聞社 1987 190）。
7. 世紀の対局の演出方法については御手洗（1955）の 173 ― 5 頁を参照のこと。
8. カリスマ現象の示唆に富む研究例としては，例えばチャールズ・リンドホルム『カリスマ　出会いのエロティシズム』森下伸也訳，新曜社，1992 年がある。
9. 佐野（2000）の下巻，第 12 章より。
10. 地方巡幸についての記述は，皇室事典編集員会編著『皇室事典　制度と歴史』角川ソフィア文庫，2019 年，375 ― 6 頁を参照。
11. 例えば，神松一三『「日本テレビ放送網構想」と正力松太郎』三重大学出版会，2005 年，有馬哲夫『日本テレビと CIA 発掘された「正力ファイル」』宝島社，2011 年などを参照のこと。
12. 正力論にとって，天皇とアメリカは極めて重要なテーマである。天皇とアメリカという刺激的な切り口を興味深く論じているのが，吉見俊哉，テッサ・モーリス－スズキ『天皇とアメリカ』集英社新書，2010 年である。
13. この表現は村上（1997：468）を参照している。またこの箇所におけるレーデラーの位置付けについても村上を参考にした。
14. 村上は多くの著書でこの価値意識の問題を取り上げているが，詳細なものとしては例えば『産業社会の病理』中央公論社，1975 年がある。

烏谷昌幸（慶應義塾大学法学部教授）